仁木町立銀山中学校

実施日：平成 23 年 11 月 11 日（金）11:40～12:30
講　師：大塚　誠之助氏（国後島出身）

今、ご紹介されました国後島泊村で生まれ育ちました大塚誠之助と申します。仁木町は、そんなに馴染みがあるわけではありませんが、中学生の頃に母親とリュックサックを背負ってリンゴを買いに来たことがあります。高校生の時に、ニセコに研修施設があり、その途中仁木町に寄ってサクランボ狩りをしたことがあります。また、家族で農園にお邪魔したこともあります。

先程ご紹介がありましたが、中学校３年生の時に、友達とたまたま海水浴に来ていて、蘭島、今は小樽市になっていると思いますが、その余市側にフゴッペというところがあり、フゴッペ洞窟を発見するきっかけを作ったということです。その第一発見者だということで、施設が新しくなってそこに、私の名前があるんですが、その話が出てくると照れくさくなってしまいます。

中学生の皆さんに北方領土の話をする機会を得られて非常に嬉しく思っています。できるだけわかりやすく話をしたと思うのですが、分からないことがあれば、最後に質問の時間を取っておりますので、お受けしたいと思います。２年生の皆さんは北方領土について勉強されているということを伺いました。１年生、３年生については北方領土については知らない人が多いのではないかと思います。高校生でも、北方領土のいうと樺太（今のサハリン）と考えている人がたくさんいます。本州の学生だったらやむを得ないところもあると思いますが、札幌の高校生がそんなことを言っているとしたら大変だなあと思います。

国後島、択捉島、色丹島、歯舞群島の四つの島を北方領土と言います。この島全部合わせて約１万７３００人の方が住んでおりました。北方領土の面積は、５，０３６㎢で、仁木町の面積が１６７．９３㎢、人口が約３，７００人ですから比較してみるとわかると思います。北方領土の面積は、千葉県、愛知県と同じ大きさになります。

私は１０才（小学校４年生）まで北方領土に住んでいました。ですから私たちの年代が北方領土のことをわかる最後の年代なのではないかと思いますので、島の様子をお話ししたいと思います。これは衛星写真になるので、これが知床半島、こちらは根室になります。尾岱沼（おだいとう）があって、砂州の野付半島があって、野付半島から国後島まで１６キロ、私が住んでいたのは、泊村という村があり、根室までは距離で４４キロ、船で３時間半かかります。気温は、択捉も含めてだいたい根室と同じくらいで夏でも平均気温が１６度、最高気温が３０度を超えるようなことはありません。冬は、一番寒い１月、２月でもマイナス６度くらいで、十勝地方よりもずっと暖かいです。海流は千島海流が流れていて、島ではジャガイモとかカボチャが穫れますが、トマトは９月になっても赤くなりません。気温が低いだけではなく、ガス（濃い霧）がかかって成長しないんです。

仁木町では、札幌オリンピックで活躍したジャンプの笠谷幸男さんがおりますが、国後島の泊村出身で日本人初の冬のオリンピックで銀メダルを取った猪谷千春さんがいます。私より４才年上です。最近まで、ＩＯＣ（国際オリンピック委員会）の副会長をやっておりました。

このあたりは、世界の三大漁場の一つで魚が大変豊富でしたから、村民の３分の２位は漁民です。私の家は曾祖父の時代に国後に渡って４代目になります。水産加工会社や商店を経営しており、酒、塩、雑貨などなんでも取り扱っていました。店から２キロぐらい離れたところに家がありましたが、ウエンナイという場所があり、７０戸で５００人くらいの人が住んでいました。

この近辺には、１３００人くらいの人が住んでいたので、小学校１年生から今の中学校２年生まで、一番多いときには２１７人が学んでいました。

１２月から３月にかけて海にびっしり７０センチくらいの厚さの氷が張るので、漁師の人は氷の下につるはしで溝を掘って網を差し込みます。氷下網待漁と言います。子供達もコマイを捕まえるために、つるはしで氷に穴を空けて手製の釣り針で魚を捕りました。また、氷の上はつるつるなので、手製のそりに筵を帆のかわりに立てて氷の上を突っ走りました。今だったら、網走沖の流氷を見に本州方面から観光客が来ますが、流氷がいつ流されるか分からない、そんな状態だけれども親も学校も何も言わなかった。本当は取ってはいけないのですが、秋には、鮭が川を上ってくるので手製の銛で突いて鮭を捕っていました。熟したハマナスの実やフレップ（ハスカップ）を取っていました。また、海岸から山側に少し上ったところには、先人が生活していた痕などを発見した懐かしい思い出があります。

当時の生活は、電気がないので、ガラスで作ったランプのホヤを毎日磨くのが子供の仕事でした。

一昨年、元島民などが北方領土に行くことができるビザなし交流で行ってきましたが、当時のまま残っていました。今も、日本人が住んでいた頃と同じくらいのロシア人が北方領土に住んでいます。この他、ここでは北海シマエビやタラバガニ、ホタテなどを捕って生活しておりました。特に、伊谷草と呼ばれ寒天の材料となる海草は、たくさん捕ると資源がなくなってしまうので、権利を持った部落の人達が捕るのは１月だけ行っていましたが、本州方面に出荷されました。

これは、天保６年（１８３５年）に建てられた神社の鳥居の写真（戦前に撮られたもの）ですが、花崗岩でできています。その頃から日本人が住んでいたいう証になっています。これは先程お話しした、２１７名が学んでいた小学校です。校門には、馬の侵入を防ぐために木が掛けられています。これは現在の川ですが、この川に鮭や鱒がたくさん上ってきました。この写真が現在の村の姿です。何もありません。

昭和２０年に戦争が終わってソ連軍が侵入してきました。北方領土に侵入してきたのは、樺太の部隊です。私の村には、９月３日に５０名のソ連兵がやってきました。本村から２キロくらい離れていたものですから、怖い思いはしなかった。ウエンナイには一人の馬に乗った将校がやってきて、私の父はロシア語がわからなかったのですが、将校がズボンの赤色を指さしていたので、家が戦前缶詰工場を経営しており、工場で使っていた赤い旗があったのでそれを屋根に掲げると、ロシア人の将校は何もせず帰って行きました。だから私たちの村の人達はソ連兵に対しては恐怖感は持っていませんでした。それでも本格的にソ連が侵入してきたら怖いという思いがあって、国後は北海道に近かったので、脱出する人が多かった。元島民のうち、約半数の人は脱出したと思います。私の家族は、別海町の風蓮湖というところにつきました。そこでの生活は大変で、着のみ着のままで脱出してきたので、蚊帳なんかはありませんでしたから、とにかく蚊に悩まされました。そこに１ヶ月ほどいて、その後網走に行って１年間ほど暮らしました。当初は、島に戻るつもりでいたのですが、そのうち戻るのをあきらめて昭和２２年には札幌に来ることになりました。しかし、生活の基盤が完全に失われているので生活は大変でした。中学３年生の時に、修学旅行で道東の阿寒に行く予定だったのですが、行けるような状況ではないので自分から辞退しました。その当時は、引き揚げ者だけではなく、周りの人達も大変だったので修学旅行に行けない人は約３割はいたのではないかと思います。高校に入る頃になると生活もようやく軌道に乗ってきました。引き揚げてから８年から９年くらいかかりました。島に残った元島民の人達は、ソ連の貨物船に乗せられてサハリン（樺太）に上陸した後、日本の船で函館に強制送還されました。

ロシアは、北方領土は第二次世界大戦の結果得た領土で、島をもらうのは当然であると言ってますが、日ロの国境の変遷を見てみると、まず、日本は、１８５５年にロシアと日魯通好条約を結んでいます。この条約によって、話し合いで択捉島とウルップ島の間にはじめて、日本とロシアの国境が決められました。この日が、新暦の２月７日に当たり、昭和５６年に「北方領土の日」と定められました。そして、１８７５年には、これ

まで日本人とロシア人が混住していた樺太とウルップ島から北の千島列島を交換する千島樺太交換条約を結んでいます。１９０５年には、日露戦争の結果、樺太の南半分をロシアから割譲しました。１９５１年に、日本は、第二次世界大戦後の講和条約であるサンフランシスコ平和条約を締結し、樺太の南半分と千島列島を放棄しましたが、北方領土は含まれていません。ですから、今私たちがロシアに対して返還を要求しているのは、もともと北海道の一部である色丹島、歯舞群島、そして国後島、択捉島でこれらの島々は日本固有の領土なのです。

日本とロシアはこれまで外交交渉を行ってきていますが、ソ連邦が崩壊した後、２０００年までに平和条約を締結して、領土問題が解決するのではいう期待もありましたが、未だに解決しておりません。領土問題は国の外交交渉で決まるものですが、国民世論が外交交渉を支え、大きな力となります。元島民の平均年齢も７７才を超えておりますので、あとどのくらい生きられるかわからりません。ですから、みなさんのような若い人に北方領土問題を考えてもらいたいと思います。北方領土問題は、根室管内だけの問題ではなくて、国の問題であるということを理解していただきたいと思います。私の話を聞いてこの問題に関心を持っていただければ幸いです。

当別町立弁華別中学校

実施日：平成 23 年 12 月 1 日（木）14:20～15:10
講　師：大塚　誠之助氏（国後島出身）

今ご紹介いただきました、国後島で一番南にある泊村（とまりむら）出身の大塚誠之助です。小学校４年生１０才までこの島に住んでいました。北方領土問題について関心を持たれたことはありますか。「北方領土は一度も外国の領土となったことのない我が国固有の領土でありながら、第二次世界大戦の終了後、ソ連軍によって占領され、ロシアとなった現在でも不法占拠が続いています。このため、一日も早く北方四島の帰属を解決して平和条約を締結することが、全国民の悲願です。」北方領土については皆さんは理解していると思いますけれども、札幌の高校生でも、サハリンを含んで北方領土と言っている人が結構います。北方領土というのは、国後、択捉、色丹、歯舞群島で４つの島が北方領土と言われるものです。

昭和２０年８月１５日に終戦となりましたが、当時、北方領土には約１７，３００人の日本人が住んでおりました。当別町の人口は、約１８，０００人ということですので、当別町より少し少ない人々が生活をしておりました。北方領土は冬でも平均が－６度くらいなので、北海道の内陸部よりも暖かい気候です。夏場は８月の平均気温が１６度までしか上がらず、太平洋側はガスがかかるので、夏になってもトマトが赤くならなかったのを覚えています。

北方領土の近海は、千島海流（寒流）と日本海流（暖流）がぶつかるところなので、昔から世界の三大漁場の一つと呼ばれ魚資源は豊富でした。そういうことから産業は漁業がメインで、それに関連した水産加工などが行われていました。今のように冷蔵設備がないものですから、塩蔵、乾物、缶詰などにしていました。タラバガニやホタテの缶詰が花形で、輸出したようです。その他の産業としては、軍馬の飼育を行っていて、択捉でも国後でも何千頭もの馬が飼われておりました。その他には、千島火山帯なので硫黄の産出がありました。また、昆布が多く取れていました。

私の家は、昭和２０年頃は雑貨商を営んでいて、配給所、水産加工、戦前は缶詰工場などを経営していましたので、多いときで２００人ほどの工員が東北や網走方面などから出稼ぎにやってきていました。国後や択捉は１８世紀の末あたりから日本人がかなり入っていて、１７９８年に近藤重蔵（こんどうじゅうぞう）が択捉島の岬に「大日本恵登呂府」という標柱を建てています。

私が生まれ育った国後島の泊村から根室まで、当時の船で３時間半かかりました。国後島ケムライ岬から野付湾までが１６キロメートルです。１２月から３月にかけてケムライ湾が凍って厚さ７０センチくらいの氷が張るので、漁師さんはそこに１０メートル位細長く氷を切って網を仕掛けて（氷下網待漁）魚を捕ります。子供にとっては氷がつるつるに張るので、絶好の遊び場で、自分たちで作った手製のそりに筵を帆に建てて走らせたり、漁師さんのそばに行って氷に穴を空けて糸に赤い布をつけて穴から垂らすと氷下魚が釣れたりしました。また、３月になると、湾の中の氷が一晩にしてなくなってしまった後、流氷が湾全体に入り込んできて、流氷に乗って遊んだりしました。今から思えば非常に危険な遊びだと思いますが、当時、学校で怒られたこともないし、事故にあったというようなことを聞いたこともありません。家の近くは海だったのでハマナスがたくさん咲いておりましたが、その他にハスカップ、総称でフレップと言われている野生の木の実がありました。

これは自分たちの村の河口の様子です。昔と違って細くなっていますが、当時、村には約５００人が住んでいました。秋になるとこの川に鮭、鱒が遡上して、子供達は手製のヤスで魚を捕っていました。今から見ると、電気もない不自由な暮らしに思えるかもしれないけれども、楽しんでいました。明かりは、石油ランプで火屋

を毎日磨くのが子供の仕事でした。これは、江戸時代の天保６（１８３５）年に御影石で作られた神社の鳥居です。これが私たちが通っていた小学校で、明治１３年に建てられました。

小学校までは２キロの道のりで毎日歩いて通いました。小学校の門には、馬が入らないように木で柵をしています。これが小学校や役場などがあった場所ですが、今は何も残っていません。

日本は、昭和１６年にソ連と中立条約を結んでいて、ソ連が日本に対して宣戦布告をするとは考えておらず、逆に、ソ連を仲介として講和条約を結ぼうと考えていた人が多かった。８月９日にソ連は日本に対して宣戦布告をし、終戦後、８月２８日にサハリン方面から択捉島に侵攻を開始し、９月２日に国後島泊村に入ってきました。私たちの住んでいたウエンナイ地区にもソ連の将校が一人で馬に乗ってやってきて、ズボンの赤いラインを指差して、もちろん私の父はロシア語はわかりませんが、家に何か赤い物を立てれというようなことに気がついて、缶詰工場の赤い旗を立てたところ、将校は満足げに帰って行ったということです。ですから、私にはソ連兵に対する怖い思い出はありませんが、島によっては、小学校の教室に銃を持った兵隊が入って来たということを言っている人もいます。

ソ連兵は当初は船で来て戻って行きましたが、ソ連兵に常駐されては困るということで、私の家族は、近所の漁師さんの船に乗せてもらって真夜中に島を脱出しました。そして、今の別海町の走古丹（はしりこたん）というところで１ヶ月間生活をして、根室に１ヶ月そして網走に行きました。当初は島にすぐ戻れるだろうという気持ちがありましたが、戻れる見込みがなくなったので、札幌に引っ越しました。私は、小学校４年生から５年生にかけて小学校を４回変わりました。網走に行っても札幌に来ても生活の基盤が全くないので、親の苦労は大変だっただろうなあと思います。そうした中で私は皆さんと同じ年頃を過ごしております。高校に入った頃には、ようやく家の仕事が安定してきたという感じで、生活が軌道に乗るまで７～８年ぐらいかかりました。それは私たち家族だけではなくて、他の人達も皆同じように苦労しました。島に残った人達は、国後の古釜布（ふるかまっぷ）に集められ、大きな１万トンクラスの船に乗せられ、択捉島を経由してサハリンの真岡（まおか）に連れて行かれました。そして、昭和２２年と２３年に分けて、９，５００人が函館に強制送還されました。島を脱出した人は８，０００人弱おりますが、私たちは運良くたどり着くことができましたが、時化で途中で転覆したり、ソ連兵に発見されて狙撃されて亡くなった方もおり、皆が大変な苦労をしてきたということです。

今、私たちは「島を帰せ」と言うことで返還要求運動を行っていますが、日本とロシアの国境の変遷を見ていきたいと思います。まず、１８５５年に日本とロシアが話し合いで国境線を択捉島とウルップ島の間に決めました。次に１８７５年に、これまで日本人とロシア人の混住の地だった樺太とウルップ島から北の千島列島の島々を交換し、樺太はロシア領、千島列島を日本領とした。１９０５年に、アメリカ大統領の仲介によりポーツマス条約を結び、日露戦争の結果として樺太の南半分が日本領になりました。そして、第二次世界大戦の講和条約である１９５１年のサンフランシスコ平和条約ですが、皆さんの研究課題にしていただきたいのは、樺太の南半分と千島列島のウルップ島からシュムシュ島までが白くなっておりますが、なぜここには色が塗られていないのか考えていただきたいと思います。敢えて答えは言いません。

北方領土は、歴史的に１回も外国の領土になったことのない領土であり、平和的な話し合いの中で取り決めをした北方領土は日本固有の領土である、というのが日本の主張ですが、日本とは関係はありませんが、アメリカ、イギリス、ソ連の三国で結んだヤルタ協定という秘密協定がありますので、興味のある人は調べて欲しいと思います。

ロシアの外交交渉は老獪でしたたかです。外交交渉を有利に進めていくためには、国民世論が必要であり、世論を背景にして粘り強い交渉をしてほしい。二島だとか半分とか国後と択捉はいらないとかという話にはならない。そんなこと言っていたら日本の国益にならないです。そのことをわかって欲しい。戦後６６年ですけ

れど、私は今７６才であと１０年経ったら元島民はいなくなってしまいます。私たちも、後継者・子供達に対してこのような話をするんですが、なかなかうまくいかないです。ですから、北方領土問題は元島民や根室管内だけの話ではなく、国民の問題です、主権の問題になります。そのような観点から粘り強くやっていかなければならない。これからは皆さんの時代になるわけですから、もし北方領土が返ってきたらそれは元島民だけの問題ではなく、国民にとってどれだけプラスになるかわからないですから、決してあきらめないで、僕らも生きている以上は頑張りますし、皆さんにも協力していただきたいと思います。